

# *The Book of Mormon* を文学的に読むとどうなるか\*

吉中孝志

文学というものが、一つの芸術形態だとすれば、この表題が意味するのは、末日聖徒イエス・キリスト教会の、『聖書』と並ぶ聖典である『モルモン書』が美的観点から、また思想的内容からどのように評価されるか、を語ることになるはずである。しかし、本論考では、多くの所謂文学的な特徴と考えられる観点の中から特に「語り」の問題に焦点を絞って、所謂「聖文」と呼ばれる宗教的な書物を文学的に読む場合の功罪について論じてみたい。それゆえ、必ずしもこの切り口が『モルモン書』の優れた側面、宗教的読者の期待する「霊的な」側面を鮮やかに見せてくれるものでもなければ、信仰を強めてくれるものでもない。ただ、願わくば、私のような懐疑論者が、『モルモン書』の中に見出した疑問点を、いつか信仰によって解決できるまで、どのように説明し、留保することができるかを示す一つのケース・スタディとはなるだろうと思われる。

さて、『モルモン書』を文学的に読む、ということと「語り」の問題がどのようにかわってくるだろうか。ここでは、文学作品の「語り」の概念と理論の深みには立ち入らないことにして、まずは、最も単純な、「視点」の観点から整理された、所謂「一人称の語り手」と「三人称の語り手」という分類が有効であると思われる。特に後者に関しては、さらに三種類に分類され、ある特定人物の眼を通じて観察し理解する「限定視点」を持った語り手、作中人物の心には立ち入らず、周辺の状況を語る「客観視点」を持った語り手、さらには、その作品世界の状況を全て把握し、作中人物の心の中まで自由に立ち入って語ることのできる、所謂、「全知の視点」を持った語り手が考えられる。所謂「聖文」の読者が期待する「語り手」は、全知全能の神自身が「一人称の語り手」として語るものでなければ、この「三人称の全知の語り手」が一番近いと考えられる。全知の視点を持った語り手は、その作品世界を作り出している、まさにその作品世界の創造／想像主たる作者、である。その作品世界の中のことに関しては、神たる語り手に「間違い」はない。全てお見通しの語り手の語ることは当然真実である、と読者は考えてその物語を理解する。ただ、文学作品の場合の全知の語り手は、その作品世界の中だけでのみ通用する真実であることが論じられても反論できない場合があることを強調しなければならない。夢の世界と現実の世界が違うように、作品世界の中で語られていることが文字通り現実世界で必ずしも当て嵌まるとは限らないからである。ところが、所謂、「聖文」と信者たちが呼ぶ書物、文学作品ではない書物、

の作者は、少なくとも観念的には、通常、全知全能の神自身、もしくは靈感を受けた預言者であり、聖文の作り出す物語世界のみならず、現実の読者である信者の住む世界においても同様に当て嵌まる真実を語ることになるはずである。「聖文」の場合、物語世界と現実世界との齟齬が発生するときには、物語内容が比喩的、靈的な意味で現実世界に適用され、作品世界の中で語られていることが現実世界でも当て嵌まる「真理」となる。例えば、エバはアダムの肋骨の一つから作られたという『旧約聖書』創世記の記述は、もともとアダムの肋骨は一本多かったとする説が採られなくとも、現実世界で解剖学的に男女の肋骨の数が同じであることと矛盾を来たさず、比喩的に、男の「助け手」である伴侶が心臓に近い、大事な部分に由来する貴重な存在であることを意味する「真理」を伝えていると考えられるのである。「聖文」に書かれていることは全て真実である、と信者が主張するのは、もっともなことかもしれない。しかし、ここで注意しなければならないこととしては、「聖文」が真実である、という前提になっているのは、「聖文」の「語り手」が間違いを犯すはずのない神自身、もしくは不可謬の預言者である、ということである。『モルモン書』は、信者たちには、古代の預言者が語る歴史がモロナイやモルモンといった編者によって語り直され、さらに19世紀初期のジョセフ・スミスに翻訳されることによって、再度、語りなおされているとされる書物である。事後予言を可能にする、過去を現在から顧みる視点はあるけれども、明らかに「全知の視点」を持った語り手は登場しないように思われる。もしも「聖文」の中に登場する「語り手」が神自身ではなく、究極的には主観的でしかない「客観視点」や「限定視点」を持った人間であることが強調されるなら、その語り手がたとえ預言者であろうと、靈感を受けたと称する伝道者・宣教師であろうと、厳密な意味で語り手＝作者／神自身とは言えず、「聖文」には真実でないことも含まれることになるのだろうか、というのが、本論考での私の問題提起である。

実際、末日聖徒の日曜学校などで、『モルモン書』のこれこれの部分は間違っている、と指摘するならば、大変な物議をかもすことになるだろう。それは、十中八九、「間違っている」という指摘をしている読者の方が、知識不足もしくは信仰不足故に、間違っているという判決が下される。不遜にも私は、或る意味、強すぎる信仰によって硬直した「聖文」理解を少し和らげられないだろうかと考えている。敢えて私が主張したいのは、『モルモン書』を文学的に読む、つまり人間の語り手によって語られた書物として読むことで、逆に瑕疵をあげつらうあまり、多くの靈感に満ちた部分を全て放棄してしまうようなことがなくなるのではないか。『モルモン書』が、信者たちの主張するように「この世で最も正確な書物」であるとしても、だからといって必ずしも完全無欠の書ではなく、ジョセフ・スミスの英語原訳の序文「もし、誤りがあるとすれば、それは人の犯した間違いである」(‘if there are faults they are the mistakes of men’) が示唆するように、「聖文」であつても人の誤りがありうるのならば、『モルモ

ン書』の語り手が人であることを逆手に取って論ずることで、間違いの可能性をやっ  
きになって否定する必要もなくなると考えるのである。<sup>1</sup>

人が「語り手」であるとき、文学的にはどのようなことを考慮しながら読まなければ  
ならないだろうか？ まず、その物語内容が如何に客観的に語られていたとし  
てもそれはあくまで「客観的」とか「ありのまま」という虚構であって、常に、人の  
語りは主観的である、ということを知識しなければならない。つまり、具体的に発話  
された言語の中には、ある特定の社会的、歴史的、文化的、階層的な属性が表れてい  
る、ということ、換言すれば、語り方、すなわち文体には、その言説が所属している  
ところの、ある歴史的、文化的、社会的なイデオロギーが刻み込まれており、語り手  
は、何らかの偏向性を帯びて語らざるをえないということを知識することである。

例えば、主の警告を信じ、父リーハイが家族を連れてエルサレムを去り、荒れ野に  
出発したあと、第1ニーファイ2章6節で、「ある谷で、水の流れている川のほとりに  
天幕を張った。」(‘he pitched his tent in a valley by the side of a river of water’) こ  
とが、ニーファイによって語られている。古代ヘブライ語では、この「川」にあたる  
語はしばしば、実際は「谷」を意味するか、流れが小さく、殆ど「川」の名前に値し  
ない場所を指したとされているから、わざわざ「水の流れている」という修飾語句を  
付け加えるのは、砂漠を旅する語り手ニーファイにとって、また、詩篇(‘the rivers of  
water’, Ps. 1:3)、イザヤ書(‘rivers of water’, Isa. 7:18)、哀歌(‘rivers of water’, Lam.  
3:48)、ヨエル書(‘the rivers of waters’, Joel 1:20)の作者たちと同じ環境に暮らした  
とされる語り手の読者にとって極めて自然な言い方であると言えるだろう。<sup>2</sup> さらに  
10節で、語り手として父リーハイは、息子レムエルに、彼らの住まう環境に大きく  
影響を与えられた比喩表現を用いて語っている。

O that thou mightest be like unto this valley, firm and steadfast, and  
immovable in keeping the commandments of the Lord!

スエズ以西に暮らす人間がこのような比喩を使うことはしないだろう、と『モルモン  
書』学者のヒュー・ニブレー (Hugh Nibley) はこの箇所を説明している。「我々なら  
ば、変わることはない丘、動かざる山、と言うだろうが、アラブ人たちにとっては、  
谷こそが永続の象徴だった。彼らが逃げ込む避難場所は、山ではなく谷であった。ア  
ラビア半島を何百マイルにもわたって走る大きな窪地が、山のない平地の大部分をな  
しており、この古くからの河床のみが、水や植物や動物の命が見出せる場所であって、  
それ以外の場所は荒れ野なのだ。谷のみが、飢えや渇きによる死からの救いや敵から  
の脱出を人や動物に与えた。堅く確固とした特性、信頼できる保護、元気を回復させ、  
確かな避難場所を与えたのは、他の民族にとっては山でも、アラブ人たちにとっては、

谷だったのだ。」<sup>3</sup>

『モルモン書』の主張された出自を信じるならば、語り手リーハイが、彼の生きた環境におそらく無意識のうちに影響された比喻を使っているのを讀んだ翻訳者ジョセフ・スミスは、それを奇異なものと感じたに違いないと推測できる。翻訳者、通訳はしばしば、読者、聞き手の理解力に配慮して、こなれた訳をするものである。たとえば、翻訳者や通訳が *That's just pie in the sky* を日本語に訳す場合、「それは空に浮かぶパイにすぎない」とは訳さずに「それは絵に描いたもちにすぎない」と訳す。しかし、ジョセフ・スミスはこの部分に関して、翻訳者がしばしば行う、自らの環境に移し変える類の翻訳を行わなかった。よく準備した末日聖徒の日曜学校の教師は、『モルモン書』が真実の書物であることを証するために、この箇所を使って、『モルモン書』がジョセフ・スミスの創作ではない、一つの証拠とするだろう。<sup>4</sup> ここでの語り方には、ある特定の、即ちリーハイの、歴史的、文化的な属性が表れていて、それは、ジョセフ・スミスのものではない、と主張することができるからである。

しかしながら、『モルモン書』の中には、ジョセフ・スミスが生きた19世紀初期のアメリカの歴史的、文化的、社会的なイデオロギーが刻み込まれている語りが多く見出されるのも事実である。翻訳者としての役割を考えるとむしろこの方が自然であると言えるかもしれない。19世紀初期の読者にジョセフ・スミスは、古代の言葉で書かれた内容を理解させる必要があったわけであるから、それを移し替えた、同時代の英語表現が、ジョセフ・スミスの語りとして表れるのはむしろ当たり前で、その意味では、『モルモン書』は、ジョセフ・スミスの言葉で語られている、ジョセフ・スミスによって書かれている、というのは否定できないだろう。

例えば、ジョシュア・ブラッドレー (Joshua Bradley) によるアメリカ19世紀初頭の信仰復興運動に関する報告が明らかにしてくれていることの一つとして、当時「改宗する」ことを意味する言い回しとして「購いをもたらした愛について歌う」(sing the song of redeeming love) という、少々、特殊な表現が頻繁に用いられたことがわかっている。<sup>5</sup> 「二百人が改宗した。」は、「二百人が購いをもたらした愛について歌うことになった。」(two hundred were brought to sing the song of redeeming love) のように表現された。ゼラヘムラの地で神の言葉を告げる大祭司アルマが改宗について語りながら、「そのとおり、死の縄目と地獄の鎖は解かれ、彼らの心は広がり、彼らは購いをもたらした愛について歌った。」(‘Yea, they were loosed, and their souls did expand, and they did sing redeeming love’, Alma 5:9) と言い、「もしあなたがたが心の変化を経験しているのであれば、また、購いをもたらす愛の歌を歌おうと感じたことがあるのであれば、今でもそのように感じられるか尋ねたい。」(‘if ye have experienced a change of heart, and if ye have felt to sing the song of redeeming love, I would ask, can ye feel so now?’, Alma 5:26) と会衆に語りかけるとき、特徴の

ある、この言葉遣いが語り手アルマ自身の言い回しであったと考えるよりも、翻訳者ジョセフ・スミスの生きたアメリカ19世紀初頭の宗教世界の言葉遣いが、アルマが使ったであろう「改宗する」を意味する原語に取って代わった、と考える方が考えやすいと思われる。つまり、語り手アルマの語りに翻訳者ジョセフの語りが刻まれている、ということである。

ジョセフ・スミスの語りが『モルモン書』の物語の語り手の語りりと重なってくる、もう一つの例をあげよう。第1ニーファイ13章と14章で、ニーファイのしている示現の中に現れる「悪魔の教会」の語られ方である。この反キリストの教会は、あらゆる偽りの宗教一般を普遍的に意味したはずである。宗派の違いに対して理解と寛容を示す現代の末日聖徒にとっては確かにそうでなければ困るはずだ。そしておそらくニーファイ自身にとってはそうだった、と考える方がより原文の価値を高めると考えられるだろう。ところが、マーク・D・トマス (Mark D. Thomas) が論じているように、ジョセフ・スミスと19世紀初期の『モルモン書』の読者にとっては、明らかに個別の、特定の教会を指す表現が使われて語られているように思われる。<sup>6</sup> ジョセフ・スミスが実際に生きた宗教世界は、議論の余地なくプロテスタントの福千年思想に支配された世界であり、その思想的文脈の中では、反キリストとは、ローマ・カトリック教会を意味した。そして、黙示録やその他の箇所に見える「獣」や「娼婦の母」、「多くの水の中にすわっている大淫婦」(黙示録17章)は、かなり明確にカトリック教会を意味し、ジョセフ・スミスが第1ニーファイ13章34節で「また、あの娼婦の母であるあの忌まわしい教会が、小羊の福音の大変分かりやすくて尊い部分[を]差し止め」た、(‘the most plain and precious parts of the gospel of the Lamb ... have been kept back by that abominable church, which is the mother of harlots’)と翻訳し、同書14章11節でニーファイが「あの全地の淫婦を眺めてみると、彼女は多くの水の上に座を占め、すべての国民、部族、国語の民、民族の中にあつて全地を支配していた」(‘And it came to pass that I looked and beheld the whore of all the earth, and she sat upon many waters; and she had dominion over all the earth, among all nations, kindreds, tongues, and people.’)と語るとき、翻訳者ジョセフ・スミスと彼の同時代の末日聖徒の頭の中には、大背教の基であるカトリック教会が思い浮かべられていたことはほぼ間違いない。トマスは、1820年、30年代のアメリカへの大規模なカトリック教徒の移民が、アメリカ19世紀初期の終末思想の中で反キリスト教会がカトリック教会と同一視される傾向を増長させたと指摘している。<sup>7</sup> 少なくとも『モルモン書』初版出版時の末日聖徒たちにとって、ニーファイの語りは、ジョセフ・スミスのプロテスタント目線の語りりと重なっていたと考えられる。

『モルモン書』が、「語り」の点から見ると、ジョセフ・スミスの時代に書かれているという明らかな、そして至極当然の証拠は、キリスト生誕の前に語っているはず

のニーファイたちが、しばしば新約聖書から、何百年も後に語られるはずのイエス・キリストの言葉を引用していることである。例えば、第2ニーファイ31章15節で「わたしはまた、御父がこう言われる声を聞いた。『まことに、わたしの愛する者の言葉は真実であり、確かである。最後まで堪え忍ぶ者は救われる。』」(And I heard a voice from the Father, saying: Yea, the words of my Beloved are true and faithful. He that endureth to the end, the same shall be saved) というニーファイの証は、ジョセフ・スミスが、マタイ10章22節('he that endureth to the end shall be saved')、24章13節('he that shall endure unto the end, the same shall be saved')、マルコ13章13節('he that shall endure unto the end, the same shall be saved')で繰り返されている、おそらくは1611年出版の欽定訳聖書の英語を使って翻訳しているということを示している。しかし、ニーファイの語りとジョセフ・スミスの／欽定訳聖書の語り为重なることで、前者の受けている示現が時間を越えた真実であることを証する効果を帯びると論じることもしよう。第2ニーファイ29章8節で、「主なる神」が「わたしは一つの国民に語るのと同じ言葉を別の国民にも語る」(I speak the same words unto one nation like unto another)と言われたことの具体的な一例を提供していることになるからである。

『モルモン書』の中の語り手の語りとジョセフ・スミスとその同時代人の語り为重なることによって、物語内容に、時間を越えた、不思議な効果が与えられる例がある。『モルモン書』学者の中には、「わたしニーファイは善い両親から生まれたので、父が学んだすべてのことの中から幾らかの教えを受けた。」(I, Nephi, having been born of goodly parents, therefore I was taught somewhat in all the learning of my father', 1 Nephi 1:1)と始まるニーファイの書をジョセフ・スミスの自伝として捉える人たちがいる。<sup>8</sup> 次の例は、その説をある意味補強することになるかもしれない。第1ニーファイ8章で、ニーファイの父リーハイの見た命の木の示現のことが詳細に語られている。「その木の実は白く、今までに見たどんな白いものにも勝って白い実」('the fruit thereof was white, to exceed all the whiteness that I had ever seen', 1 Nephi 8: 11)を食べ、家族にも食べてほしいとリーハイは思う。また、「川の岸に沿ってずっと延び、わたしの立っているそばの木の所まで達して」いる「鉄の棒」('a rod of iron ... extended along the bank of the river and led to the tree by which I stood', *ibid.* 8:19)と「細くて狭い道」('a strait and narrow path', *ibid.* 8:20)と人々を包む「暗黒の霧」('a mist of darkness', *ibid.* 8:23)を見る。さらに、「川の向こう側に、一つの大きく広々とした建物」('on the other side of the river of water, a great and spacious building', *ibid.* 8: 26)が見え、その中は人が「いっぱい」で、その「非常に華やか」な「衣服の装い」をした人々が、鉄の棒につかまり「木の所までやって来てその実を食べている人々を指さし、あざけり笑っている様子」('it was filled with

people, ... and their manner of dress was exceedingly fine; and they were in the attitude of mocking and pointing their fingers towards those who had come at and were partaking of the fruit', *ibid.* 8:27) を見るのである。翻訳者ジョセフの母、ルーシー・マック・スミス (Lucy Mack Smith) によるとジョセフの父、ジョセフ・スミス・シニアも、リーハイと同じように「幻を見る人」('a visionary man', 1 Nephi 5:2) であったようで、彼の見た幾つかの示現が記録されている。<sup>9</sup> その一つの夢の中で、父ジョセフ・スミスは、示現の中でのいつもの「導き手」('My guide, who was by my side as before') に連れられて「狭い道」('a narrow path') を旅している。「美しい水の流れ」(a beautiful stream of water') があって、「その岸辺に沿ってロープが伸びて」('a rope running along the bank of it') おり、「心地よい谷間」('[a] very pleasant valley') に「極めて美しい木」('[the] tree ... was exceedingly handsome, insomuch that I looked upon it with wonder and admiration') が立っているのを見ている。その木の実は「輝くように白く」('of dazzling whiteness')、  
「言葉にならないほど美味で」('delicious beyond description')、彼は、自分の妻と子供たちにも食べさせたいと願う。谷の反対側には「まさに天にも達する」「広々とした建物」('a spacious building standing opposite the valley that we were in, and it appeared to reach to the very heavens') が建っていて、その中にいる、たくさんの「美しく着飾った人々」('people who were very finely dressed') が木の下にいる自分たちを「指さしてあざけっている」('they pointed the finger of scorn at us and treated us with all manner of disrespect and contempt')、という。そして父ジョセフ・スミスは彼の「導き手」から、この広々とした建物が「バビロン」を表すこと、神の聖徒たちがその謙遜さ故にバビロンに住まう人々に嘲られ、軽蔑されているのだという説き明かしを受ける。この、ルーシー・マック・スミスによる息子の伝記は、1853年に出版されており、『モルモン書』の出版が先行するわけで、影響関係の方向は、必ずしも父から子へ、というふうには断定できないが、夫の見た示現をスミス一家がヴァーモント州ロイヤルトンからニュー・ハンプシャー州レバノンへ引っ越して間もなくの1811年だと回想するルーシーの記録が虚偽ではないとすると、そして息子ジョセフ・スミスが、ニーファイのように、父からの教えを受けたとすると、父ジョセフ・スミスが、息子が『モルモン書』を翻訳する以前に、この「とても不思議な示現」を息子に話さなかったと考えるのは逆に難しいかもしれない。リーハイもニーファイも、そして父ジョセフも息子ジョセフも、母ルーシーも皆が真実を語っているとすれば、こうなるだろう。つまり、リーハイが命の木の示現を見る。それを聞いてニーファイが命の木の示現を語る。父ジョセフ・スミスが命の木の示現を見る。それを妻、ルーシーが聞く。おそらく、息子ジョセフ・スミスも父の見た示現について聞く。もしそうなら、『モルモン書』を翻訳しながら、息子は非常に不思議な思いで、リーハイの示現を語

りなおしていることになる。父リーハイと息子ニーファイ、そして父ジョセフ・スミスと息子ジョセフ・スミスが、時間の流れを超越した、ほとんど同じ示現を媒介にして、重なり合うことになるからである。父の受けた示現を語りなおす息子という共通項でニーファイの語りとジョセフ・スミスの語りは重なり合い、翻訳者ジョセフ・スミス自身が、「主なる神」は「一つの国民に語るのと同じ言葉を別の国民にも語る」ことを強く実感することになったと思われる。

信仰を前提とした議論の中に、誰かが嘘をついている、という可能性を持ち込むと「聖文」としての信憑性を疑い始めることになってしまい、信仰自体を崩してしまうことになる。しかしながら、現代の文学理論で考えると、「真実を語る」という言葉は、一種の矛盾同着語法のようにも響くだろう。「語り」には、常に「騙り」、つまり「だます」というニュアンスが伴うからである。真実を「語った」／「騙った」時点で真実は真実でなくなる。「物語」という言葉に「架空のお話し」、「絵空事」というニュアンスが感じ取れるならば、佐藤龍猪訳『モルモン経』の語り方、例えば「私ニーファイは・・・ここに私の物語を終わらなくてはならない」(第2ニーファイ30章18節)が、現代では、別の訳を必要としたのも当然かもしれない。<sup>10</sup> ともあれ、語り手というものは、たとえ故意にだまさなくても、無意識的にでも、ある偏りや主観をいやおうなく伴って語らざるをえない。この「語り」の概念を顕在化させたのが、ウェイン・ブース (Wayne C. Booth, 1921-2005) という英文学者によって造り出された、文学批評理論の用語「信頼できない語り手」(an unreliable narrator) である。<sup>11</sup> 信頼できない語り手は通常一人称の語り手の場合が多いようであるが、三人称の語り手が信頼できない語り手になる場合もある。語られていること、書かれていることが信用できなくなる原因は、例えば、アガサ・クリスティの探偵小説『ロジャー・アクロイドの殺人』(Agatha Christie, *The Murder of Roger Ackroyd*, 1926) の語り手のように、良心的で誠実そうな語り方が実は読者や登場人物を故意にだまそうとするものである場合もあれば、マーク・トゥエインの『ハックルベリー=フィンの冒険』(Mark Twain, *The Adventures of Huckleberry Finn*, 1884) の主人公ハックのような子供の語り手がしばしばそうであるように、未熟ゆえの経験不足や知識不足が語り手の判断を損ない、その語り方が信頼できないものになってしまう場合などがある。信頼できない語り手を作り出すのは、その作者によって意図されたものであろうとなかろうと、その語り手の心理的不安定さであったり、イデオロギーや文化的な価値観による強力な偏向性であったりすることもある。例えば、『ハックルベリー=フィンの冒険』の語り手ハックは、黒人少年ジムの友達であり味方であるにもかかわらず、奴隷制度を是認するアメリカ南部の白人の視点という偏向性によって「信頼できない語り手」となっている。ハックは、現代の視点から見れば、義に適った英雄的行為とも言える、黒人ジムを「奴隷の身分から救い出す仕事」(‘to work and steal Jim out of slavery’) に

むしろ良心の咎めを感じ、神様が「許さんぞとおっしゃっているのだ」と語る。ハックが生きている世界では、黒人奴隷を盗むことは、所有者の財産を盗むということだったからである。

And at last, when it hit me all of a sudden that here was the plain hand of Providence slapping me in the face and letting me know my wickedness was being watched all the time from up there in heaven, ... and now was showing me there's One that's always on the lookout, and ain't agoing to allow no such miserable doings to go only just so fur and no further, I almost dropped in my tracks I was so scared. Well, I tried the best I could to kinder soften it up somehow for myself, by saying ... and so I warn't so much to blame; but something inside me kept saying, "There was the Sunday School, you could a gone to it; and if you'd a done it they'd a learnt you, there, that people that acts as I'd been acting about that nigger goes to everlasting fire." It made me shiver.<sup>12</sup>

ハックは、差別用語である「黒んぼ」(‘nigger’)という言葉に差別するつもりもないまま無意識に使っている。それと同様に、彼の「良心」や「神様」の声も、そして、黒人に自由を与えようとする彼の行為が、強い罪の意識をもたらすのも、19世紀アメリカ南部社会のイデオロギーが文化や教育によって殆ど無意識のレベルにまで刷り込まれた結果なのである。故に、彼が聞いている声は、彼が神様の声だと思い込んでいる自分の声であることは、現代の読者には明白である。この「信頼できない語り手」の概念を「聖文」である『モルモン書』に援用するとどうなるだろうか。

『モルモン書』の中に現われる、最もわかりやすい「信頼できない語り」は、偽預言者や偽善売教者の語りだろう。なぜならば、例えば、異端者ニーホルが「全人類は終わりの日に救われるので、人は恐れる必要もおののく必要もない、・・・結局全ての人が永遠の命を得る」(‘all mankind should be saved at the last day, and ...they need not fear nor tremble ... and in the end, all men should have eternal life’, Alma 1: 4)と公言して、神学上の普遍救済説を唱えて、多くの者が彼の言葉を信じたとしても、それを、より高いレベルで語り直す、モルモンの語り、彼らは、「あえて公然とは偽りを言わなかった。それで、自分の信条に従って教えを説いているふりをした。」「(they durst not lie ... therefore they pretended to preach according to their belief’, *ibid.* 1:17) ことを確実に暴いてしまうからである。偽預言者や偽善売教者が、「ふりをし」ている「信頼できない語り手」であることは、それを語り直す高次の編集者・語り手によって確実に意識され、意図された工夫であると言える。しかし、私がここで問題

にしたいのは、もっと微妙なケースである。ある語り手が「ふり」をしているのかしていないのかを教えてくれる、さらに高次の語り手がいない場合である。換言すると、「聖文」の作者である神が、意図したものであろうとなかろうと（もつとも、末日聖徒の神がカルヴィニズムの全知全能の神だとすると、意図していない、というのは不可能な仮定になるが）、人間である語り手が語り手であるがゆえに、いやおうなく信頼できない語り手の要素を露呈する、と考えられるかもしれない事例について考察してみたいのである。

ジョセフ・スミスを含めた初期の末日聖徒たちと同様に、『モルモン書』の主な語り手と言っているモルモンとモロナイも、末日のアメリカ原住民たちをイスラエルの家の生き残りであるレーマン人たちの子孫だとみなしているように思われる（『教義と聖約』28章8節、32章2節、54章8節、『モルモン書』モルモン7章1-10節、モロナイ10章1-23節 参照）。ニーファイは、「イスラエルの家に属する」自分たちの「子孫」が「異邦人の中に一つの強大な国民」すなわちアメリカ人によって「散らされ」、その後、彼らに福音がもたらされることを預言している（第1ニーファイ13章33-34、38章、22章7-9節 参照）。これらの語り手たちが前提にしている、アメリカ原住民はセム系統の人種であるという考え方は、現代の文化人類学的、生物学的観点からみると、大きな問題を抱えているように思われる。なぜなら、今日のアメリカ原住民が持つ蒙古ひだ、幼児脊椎基底部の蒙古斑、歯型などの身体的特徴はアジア人の特徴を示していると考えられているからである。この問題に対する一つの、信仰によらない、解決方法は、非常に単純ではあっても、アメリカ原住民が遺伝学的にイスラエルの家の残りのものたちだという考え方は、『モルモン書』の語り手たちの、知識不足に由来する思い込み、間違いであったのではないかと考えることである。

「信頼できない語り手」を想定して構わないのではないかと、という私の主張は、『モルモン書』の語り手たちの持つイデオロギーや文化的な価値観による偏向性とも言える、白人の視点が顕在化するときに一層強くなるように思われる。例えば、「わたしニーファイ」は、アメリカ原住民の祖先たちがなぜ黒い肌を持つようになったかを次のように語る。

And he [i.e., God] had caused the cursing to come upon them, yea, even a sore cursing, because of their iniquity. For behold, they had hardened their hearts against him, that they had become like unto a flint; wherefore, as they were white, and exceedingly fair and delightsome, that they might not be enticing unto my people the Lord God did cause a skin of blackness to come upon them. (2 Nephi 5:21)

そして、さらに主の戒めとして、異人種間結婚（文化人類学・社会学用語としての miscegenation）を禁じるのである。「彼らの子孫と縁を結ぶ者の子孫はのろわれる。それらの者は同じのろいを受けるからである。」（‘And cursed shall be the seed of him that mixeth with their seed; for they shall be cursed even with the same cursing’, *ibid.* 5:23）つまり、遺伝学的に優性であるために引き継がれた黒い肌もまた、「のろい」だと言うのである。アメリカの歴史を振り返ると、1691年のヴァージニア植民地を皮切りに、全米各地で、奴隷制度、人種隔離政策に擁護されながら、異人種間結婚を禁止する法律が制定され、南部のアラバマ州では、2000年になってようやく異人種間結婚禁止法が撤廃されたほどであるから、ジョセフ・スミスの時代の読者が、ニーファイの語りに何ら人種差別的問題を感じなかったことはむしろ当然かもしれない。1787年出版の『人類の肌の色と形態における多様性の理由に関する論考』（*An Essay on the Causes of the Variety of Complexion and Figure in the Human Species*）という書物で、聖職者であるサミュエル・スタンホープ・スミス（Samuel Stanhope Smith）が、人種間の優劣を同一起源からの degeneracy とみなしていた時代であった。

興味深いことに、現代の『モルモン書』は、この人種差別的な聖句の勢いを和らげるためであるかのように、脚注で、「結婚—異なった信仰を持つ人との結婚」（Marriage, Interfaith）を解説した聖句ガイドを参照するように導いている。ここで禁じられているのは、白人と有色人種との結婚ではなく、信仰を異にする人同士の結婚であると解釈せよ、というふうに読者を導いているのだ。同様に、ダグラス・キャンプベル（Douglas Campbell）の調査によれば、ジョセフ・スミスの生存中に出版された『モルモン書』の後続版で、初版本のレーマン人に対するのろいへの言及のうちの幾つかの箇所を言い換えることによって黒い肌への否定的な見解を正そうとした試みの跡が見られる。<sup>13</sup> 例えば、出版前の原稿と1830年出版の初版に記されている第2ニーファイ30章6節では、ニーファイは、終わりの日にレーマン人の子孫たちがイエス・キリストの福音に改宗して「彼らは白い、喜ばしい民になる。」〔1978年の日本語第30版佐藤龍猪訳『モルモン経』では、「皮膚の色が白くて喜ばしい民になる。」〕（‘they shall become a white and delightsome people.’）と預言しているが、1840年版では、「彼らは清い、喜ばしい民になる」（‘they shall be a pure and a delightsome people’）となっている。この「白い」から「清い」への変更は、黒さというものを肌の黒さではなく、霊的な暗さへと解釈しなおそうという試みであると考えられる。1840年から1981年の間のほとんどの版は、「清い」ではなく、もとの「白い」を維持しているが、現代の末日聖徒が使っている1981年版の英語、1995年版日本語訳『モルモン書』では、それぞれ、‘pure’、「清い」となっている。

それでいて、現代版でも第3ニーファイ2章15節のモルモンの語りでは、義人となったレーマン人の「のろいは取り去られ、彼らの肌はニーファイ人のように白くなった。」(‘And their curse was taken from them, and their skin became white like unto the Nephites’)と統一のとれた改定になっていない。末日聖徒たちは、間違いのあるはずのない「聖文」の中でニーファイたちが語る「黒い肌」を原文にある、文字通りの神の「のろい」と採るべきなのか、それとも汚い心、穢れた靈性の意味に解釈することによって、新しい、人種差別的でない理解を得ようとすべきなのかの狭間で揺れているようにも思われる。ともあれ、19世紀アメリカの黒人やアメリカ原住民を差別することに違和感を感じなかった時代の読者ならいざしらず、少なくとも1968年、合衆国連邦最高裁が異人種間結婚禁止を違憲と宣告した後の、多文化主義を標榜する現代の読者にとって、ヤコブが語るように「彼らが汚いのは彼らの先祖のためであることを覚えておきなさい」(‘remember that their filthiness came because of their fathers’, Jacob 3: 9) という勧告は、「科学的に支持できないのみならず道徳的にも忌々しい、とても受け入れられない」というマーク・D・トマスのような反応を否めないのではないか。<sup>14</sup> 『モルモン書』自体が、『新約聖書』のガラテヤ3章28節の「もはや、・・・奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。」(‘there is neither bond nor free, there is neither male nor female: for ye are all one in Jesus Christ’)を補足するかのようになり、第2ニーファイ26章33節で「主は・・・全ての人を招かれる。したがって主は、黒人も白人も、束縛された者も自由な者も、男も女も、主のもとに来る者を決して拒まれない。」(‘he inviteth them all to come unto him ... and he denieth none that come unto him, black and white, bond and free, male and female’)と神の前での、肌の色を越えた平等を強調していることを思い出すと、結局のところ、『モルモン書』に紛れ込んでいる白人目線、自民族中心主義は、人間としての語り手がいやおうなく持たざるをえない科学的知識不足や道徳的狭量さに由来するものではないだろうか。

しかし、私は、時に「信頼できない語り手」になってしまう『モルモン書』の語り手たちが虚偽を語っている、と言って責めるつもりは毛頭ない。リーハイが見た示現の中で、命の木の実は、輝くような「白さ」を特徴としていた。「白さ」が清さを、その対極として「黒さ」が邪悪さを表すのは文学的、文化的な伝統の中で作られた、非常に強い偏向性であると言ってよい。必ずしも白い肌が美しいのではない。黒人開放運動に力のあったレトリックは、「黒は美しい」(Black is beautiful)であった。ただ、『モルモン書』の語り手たちは、ちょうど日本人の男性が未だに意識せず、一種の男女差別とも知らず、伴侶のことを「うちの家内」「うちの奥さん」と呼んで男女の役割を規定する手助けをしているのと同じように、文化的な偏向性を刷り込まれた状態で、聖霊や神の言葉を語りなおしているだけなのではないだろうか。

次に、「信頼できない語り手」を想定することで『モルモン書』の物語内容に、整合性のある解釈を与えることができるかもしれない例を挙げたい。『モルモン書』は、アルマの子であり預言者であるヒラマンの手紙にもあるように、しばしば、防衛のための戦争は義であるとし、「神が自分たちを自由なものにしてくださったその自由にしつかりと立つ」(‘they stand fast in that liberty wherewith God has made them free’, Alma 58:40) ことを勧めているように思われる。アルマ書で引用された手紙の中でニーファイ人三代目の大さばきつかさパホーランも、防衛のための戦争は義に適っているということを何度も繰り返している(アルマ61章10-14節)。

Therefore, my beloved brother, Moroni, *let us resist evil*, and whatsoever evil we cannot resist with our words, yea, such as rebellions and dissensions, *let us resist them* with our swords, that we may retain our freedom, that we may rejoice in the great privilege of our church, and in the cause of our Redeemer and our God. (Alma 61:14, emphasis mine)

しかしながら、義に適った戦争がある、とする考え方は、同じアルマ書の中にある、アンモンの民の示す完全な平和主義(アルマ24章1-28節)とは、相容れぬ考え方であることは明らかである。何よりも、パホーランの語る「わたしたちの購い主」自身は、マタイ5章38-39節にあるように、より高いレベルでの教えを説いていることを想起しなければならない。

Ye have heard that it hath been said, An eye for an eye, and a tooth for a tooth: But I say unto you, That ye *resist not evil*: but whosoever shall smite thee on thy right cheek, turn to him the other also.

(Matthew 5: 38-39, emphasis mine)

ちょうど、モーセの律法に縛られた旧約の民が、「悪に手向かうな」という新しいイエス・キリストの教えを理解できなかったように、パホーランの語りは、十分に高い霊的なレベルに達していない語り手の語る戦争擁護論になってしまっている、と解釈できないだろうか。この解釈を支持してくれるかのように、アルマ書を編集した、より高い位置にいる語り手、モルモンは、末日のレーマン人に向かって「武器を捨て、もはや血を流すことを喜びとせず、神から命じられるのでなければ、二度と武器を取ってはならないことを知りなさい。」(‘Know ye that ye must lay down your weapons of war, and delight no more in the shedding of blood, and take them not again, save it be that God shall command you’, Mormon 7:4) と勧告している。現代的な視点から

見れば、「神から命じられることがなければ」という条件は、神から命じられたと思ひ違ひをすることも警告しているように思える。キリスト教国のアメリカが正義であつて、イスラム教国のイラン、イラクが悪の枢軸であるという大義のために戦争を行うことや9. 11の同時多発テロ事件を契機に防衛戦争を開始することは、そして、いくら「言葉で阻止できない悪」であつても武力行使による解決を求めることは、まさしく争いの父である悪魔の思ふ壺にはまってしまうことをもう我々は知っていないだろうか。ニーファイ人の軍隊の司令官、モロナイが敵に対して「血には血を、命には命を求める」(‘blood for blood, yea, life for life’, Alma 54:12) と言ひ、次のように語る時、正当化された防衛戦争がその枠を超えてしまい、さらなる争いへと増幅してしまうように思われる。

Behold, I am in my anger, and also my people; ye have sought to murder us, and we have only sought to defend ourselves. But behold, if ye seek to destroy us more we will seek to destroy you. (Alma 54: 13)

モロナイの手紙を「脅迫」(‘threatenings’, *ibid.* 54:16) と受け取つたレーマン人の王、アモロンは、「腹を立て」(‘Ammoron ... was angry’, *ibid.* 54:15)、殺された兄弟、アマリキヤの「血の報復」(‘I will avenge his blood upon you’, *ibid.* 54:16) を求める。さらに、アモロンの手紙を受け取つたモロナイは、「ますます怒つた」(‘Moroni ... was more angry’, *ibid.* 55:1)。争いが争いを、怒りが怒りを呼び、復讐が復讐を呼ぶ。たとえモルモンが別の箇所で、モロナイを神の人であると語つていても(アルマ4章17節)、争いの心を持つ語り手が「信頼できない語り手」であることが、さらに高次の語り手であるイエス・キリストによって示唆されているとは考えられないだろうか。アメリカ大陸に現われたイエス・キリストは、第3ニーファイ11章29節で、「まことに、まことに、あなたがたに言う、争いの心を持つ者はわたしにつくものではなく、争いの父である悪魔につくものである。悪魔は互いに怒つて争うように人々の心をおり立てる。」(‘For verily, verily I say unto you, he that hath the spirit of contention is not of me, but is of the devil, who is the father of contention, and he stirreth up the hearts of men to contend with anger, one with another’) と語つたのであるから。

最後にもう一箇所、私個人にとって「信頼できない語り」の可能性を感じさせる例を挙げたい。それは、『モルモン書』の極めて始めの方で展開される筋であることも手伝つて末日聖徒にとって非常に有名なお話で、ニーファイが悪者ラバンからモーセの律法が刻まれた真鍮の版を奪回するお話に現われる未だに私にとってはショッキングなくだりである。

And it came to pass that the Spirit said unto me again: Slay him, for the Lord hath delivered him into thy hands; Behold the Lord slayeth the wicked to bring forth his righteous purposes. It is better that one man should perish than that a nation should dwindle and perish in unbelief.

(1 Nephi 4: 12-13)

「聖文」であるかぎり、「主」や「御霊」の言葉を疑っては元も子もない。それでも私は、靈感を受けた、と熱く語り、殺人を犯す人間ニーファイに、幻を見ている「信頼できない語り手」の影を感じてしまう。その原因の一つは、私の記憶の中に残っている、クリストファー・マーロウ (Christopher Marlowe) の書いた『マルタ島のユダヤ人』(*The Jew of Malta* [1633]) の一場面のせいかもしれない。第一幕第二場で、トルコへの年貢金が、侵略を回避するために、当時キリスト教徒から蔑まれていたユダヤ人から徴収されることになる。重要なのは、マルタ島の総督ファーニーズが、ユダヤ人の金貸しバラバスに対して語る台詞は、キリスト教国のマルタ島や上演当時のイギリスでは、かなりの説得力を持った正論として受け入れられたことは想像に難くない、ということである。

Barabas. Will you then steal my goods?  
Is theft the ground of your religion?  
Ferneze. No, Jew, we take particularly thine  
To save the ruin of a multitude:  
And better one want for a common good  
Than many perish for a private man.<sup>15</sup>

しかしながら、当時と異なったイデオロギーを持っている現代の読者は、ファーニーズの語るキリスト教徒＝「公共」という、キリスト教中心主義や彼らの先祖がキリストを十字架につけたがゆえに子々孫々にわたってユダヤ人が迫害されるのは当然だという考え方を疑問視せざるをえない。それで、少なくとも現代の観客には、シェイクスピアの『ベニスの商人』に出てくるユダヤ人シャイロックに対するように、悪者であって、とことん打ちのめされるのが当然のはずの登場人物に、同情を示す反応や読み方が現われる。あまりにキリスト教徒は横暴すぎる、という反応である。そうすると、キリスト教徒の利益代表であるファーニーズの言説は、よけいに「信頼できない語り」として響いてこないだろうか。理屈はあっているようでも根本にあるのはユダヤ人迫害精神でしかないのではないか。

ひょっとすると、ニーファイが聞いた聖霊の声とファーニーズの論理の基になって

いる、共通のテキストは、ヨハネの11章50節のユダヤ人の大祭司カヤパの預言の言葉かもしれない。

...it is expedient for us, that one man should die for the people, and that the whole nation perish not. (John 11:50)

ヨハネはこの言葉を解説して、「イエスが国民のために、ただ国民のためだけではなく、また散在している神の子らを一つに集めるために、死ぬことになっている」(51-52節) という意味であることを明らかにしているが、皮肉なことに、イエスを疎ましく思っていたユダヤ人やパリサイ人たちは、彼らの大祭司の預言したこの言葉を聞いた「この日からイエスを殺そうと相談した。」(53節) ののである。つまり、大義の為にはひとりの人を殺すのは構わないという論理を用いたのは、イエス殺害を目論んだ共謀者たちだったのである。もしも、預言の誤った理解から、ユダヤ国民を滅ぼさないために、一人の神の子を殺害しようとするユダヤ人たちが、マルタ島のキリスト教徒全体の自由を守るために、一人のユダヤ人を犠牲にする総督ファーニーズや一つの国民の信仰を守るために、一人の命を滅ぼすニーファイと重ねられるならば、ファーニーズの論理もニーファイの受けた聖霊の導きも、その犠牲者への同情もあいまって、少なくとも私には、説得力を著しく欠くように思われる。

『モルモン書』のユダヤ人ラバンの場合も、画一化されたユダヤ人のイメージを踏襲しているかのように、バラバスと同じように、強欲で、自分の利益のためには手段を選ばない人物として描かれている。そして、先に彼がニーファイの「命を奪おうとした」(第1ニーファイ4章11節) ことが、ニーファイにとって「御霊」に従って「ラバン自身の剣で彼の首を打ち落とす」(18、19節) 際の理由の一つにもなっている。つまり、目には目を、剣には剣で、の論理で、防衛のためならば、戦争はやむなし、という考え方に通ずる論理である。しかし、先に見たように、悪に手向かわない、別の、粘り強い交渉の余地、愛による解決方法はなかったのか。それが無理だったのは、靈感を受けてはいても、結局のところ、ニーファイが旧約の律法に支配された、知恵に不足した「語り手」だったからではないか。<sup>16</sup> ニーファイの聞いた聖霊の声は、奴隷制度化で奴隷解放を答める、ハックの聞いた神の声と同じように、何らかの偏向性を与えられた語り手の声が混じったものだとなれば、「わたしニーファイ」もまた「信頼できない語り手」ということになってしまう。

『モルモン書』を文学的に読むとき、たとえその中に「誤り」があるとしても、「それは人の犯した」、つまり「信頼できない語り手」の、「間違いである」と説明することが容易になる。逆に、「聖文」の読者にとって、『モルモン書』を文学的に読むときの一つの弊害は、マーロウの作品でマルタ島の総督ファーニーズの語りをキリスト教

徒の偏った物の見方に支配された語りだ、と読んでしまうのと同じように、たとえそれが預言者や靈感を受けた語り手の語りであっても「信頼できない語り」として読んでしまうことにあるだろう。聖文の語り手が信頼できるかできないか、それを判断するためには、「命の木」の示現について語るリーハイを、「幻を見る人」(第1ニーファイ5章2節)ではあっても、信頼できる語り手として確かめるためにニーファイが「父の見たことをわたしも見たいとのぞんでいます」(‘I desire to behold the things which my father saw’, 1 Nephi 11:3) と御霊に言ったように、自らが信仰によって同じ示現／幻を見るしか方法はないように思われる。

「語り」において、語り手は、いつも聞き手に対し、より優越した立場から聞き手を自らの言葉にまきこんでいくという「騙り」の性質を持っている。「聖文」を信仰の目で読む読者にとって、本論考の語り手たちの中で最も「信頼できない語り手」は、他ならぬこの論文の一人称の語り手、すなわち「わたし吉中孝志」であることを最後に付け足しておきたい。

#### 注

\*この論文は、2008年度モルモニズム研究会(9月15日、於 広島国際学院大学立町キャンパス)で口頭発表した原稿を加筆修正したものである。この研究会に招いてくださり、多くの資料提供と発表の機会を与えて下さった沼野治郎教授に感謝したい。

1. 原文の引用は別の注がない限り、*The Book of Mormon: Another Testament of Jesus Christ* (Salt Lake City, Utah: The Church of Jesus Christ of Latter-Day Saints, 1989) からであり、日本語訳は、『モルモン書—イエス・キリストについてのもう一つの証』(東京: 末日イエス・キリスト教会、1995年)からのものである。
2. Alexander Cruden, *Cruden's Complete Concordance to the Old and New Testaments*, ed. A.D. Adams, C.H. Irwin, and S.A. Waters (Grand Rapids, Michigan: Zondervan Publishing House, 1968), s.v. river, rivers.
3. Hugh Nibley, *An Approach to the Book of Mormon* (Salt Lake City, Utah: Deseret News Press, 1957), pp. 234-235.

4. 『モルモン経—宗教コース121-122 生徒用資料』教会教育部編（東京：末日聖徒イエス・キリスト教会、1991）、16頁、（2-11）、「モルモン経が書かれたものでなく翻訳されたものであることを示す興味深い証拠」参照。
5. Joshua Bradley, *Accounts of Religious Revivals in Many Parts of the United States from 1815 to 1818* (Albany, NY: G. J. Loomis, 1819), p. 152.
6. Mark D. Thomas, *Digging in Cumorah: Reclaiming Book of Mormon Narratives* (Salt Lake City, Utah: Signature Books, 2003), pp. 113-118.
7. *Ibid.*, p. 114.
8. たとえば、Robert D. Anderson, *Inside the Mind of Joseph Smith: Psychobiography and the Book of Mormon* (Salt Lake City, Utah: Signature Books, 1999) を参照。
9. Lucy Mack Smith, *History of Joseph Smith by His Mother: The Unabridged Original Version*, Compiled by R. Vernon Ingleton (Arlington, Virginia: Stratford Books, 2005), pp. 85-88.
10. 『モルモン経』（1957年初版；第30版、東京：末日聖徒イエス・キリスト教会 東京ディストリビューション・センター、1978年）
11. Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction* (Chicago: University of Chicago Press, 1961).
12. Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn*, ed. Walter Blair and Victor Fischer (Berkeley: University of California Press, 1985), pp. 271, 268-269.
13. Douglas Campbell, "'White' or 'Pure': Five Vignettes", *Dialogue: A Journal of Mormon Thought*, 29 (Winter, 1996), pp. 119-135.
14. Mark D. Thomas, *Digging in Cumorah: Reclaiming Book of Mormon Narratives*, p. 84.

15. Christopher Marlowe; *The Jew of Malta*, 1.2.95-100, ed. N.W. Bawcutt (Manchester: Manchester UP, 1978), p. 82.
16. Andrew Bolton は、マタイ 26 章 52 節のイエスの言葉「剣をとる者はみな、剣で滅びる。」をジョセフ・スミスの暗殺に当て嵌め、『モルモン書』の作者／翻訳者が聖戦を是とする、暴力的アメリカの文化に捉えられていたことを指摘している。‘Anabaptism, the Book of Mormon, and the Peace Church Option’, in *Dialogue: A Journal of Mormon Thought*, 37 (Spring, 2004), p. 93: ‘Though Smith saw the promised land of nonviolent Zion, like Moses he could not live in it. Moses was still caught by Egypt, and Smith was still caught by his violent American culture’.